

# 金沢大学資料館における博物館実習の取り組み

The effort to the practice of museology in Kanazawa University Museum

金沢大学資料館 学芸担当職員 笠原 健 司

KASAHARA, Takeshi

## はじめに

金沢大学資料館（以下、資料館）では、平成26、27年度の後期に金沢大学生による企画展を開催した。学生は学芸員資格取得を目指して博物館学の科目を履修する学類4年生が主で、平成26年度は25名、平成27年度は20名が同企画展の制作に参加した。これらの学生は1年生あるいは2年生の段階から博物館学の科目を履修しており、4年生の段階でその総仕上げである博物館実習に参加する。ここで述べる企画展はこの博物館実習の授業の課題として行われたものである。博物館実習は通年開講であり、資料館の副館長である有村誠（金沢大学新学術創成研究機構）が実習担当の教員である。金沢大学の平成27年度シラバスには博物館実習の主題を次のとおりにしている。「学芸員の実務について実地に学習する。大学や博物館での実習に参加することで、学芸員の職務内容および博物館の社会的役割について認識と理解を深める。」<sup>i</sup>ここに書かれている大学や博物館とは、前者が授業や資料館で行う学内実習、後者が大学以外の博物館、美術館等で行う館外実習を指す。学生による資料館企画展の実施は、学内実習の一環として行われた。

本報告では、これまでの博物館学に関する科目と資料館の関係を踏まえた上で、平成26、27年度に資料館が学生による企画展にどのように関わったか、また展示準備で生じた課題等について資料館職員の立場から述べる。

## 1. 資料館と博物館学に関する科目のかかわり

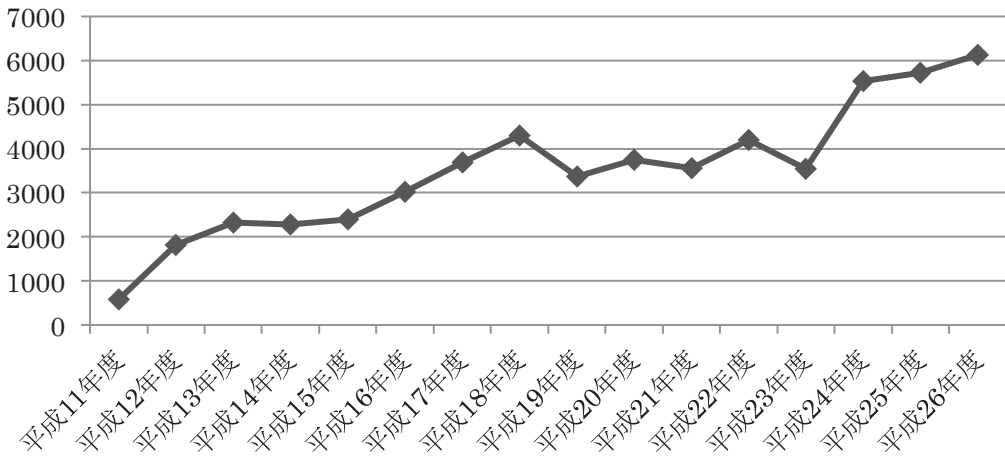
開館から28年目を迎える資料館は早い時期から博物館学に関する科目に協力をしてきた記録が残っている。まず、このことについて述べる前提として、開館から現在に至る資料館の沿革およびその展示活動についてふれておく。資料館は金沢大学が城内キャンパスから角間キャンパスへの総合移転を開始した1989（平成元）年に設置された。資料館の設立には、キャンパスの移転に際して大学が所蔵する貴重な資料が廃棄されないように、あるいは散逸しないようにするという意図があった。また、設立当初から資料展示のできる博物館機能を備えていたという点も重要である。設立時から単なる収蔵庫ではなく、教育普及のための展示機能を有していたということになる。また、学術資料の収蔵に加え、2001（平成13）年からは大学史資料の収集も始めた。2015（平成27）年12月現在で学術資料が約65,000点<sup>ii</sup>、文書資料は約11,000点が収蔵されている。

開館から現在に至るまで資料館の利用は年々高まっており、特に展覧会の入館者数はほぼ毎年

更新されている(表1)。記録が残っているのは1999(平成11)年度の576名からで、最近の2014(平成26)年度では6,126名となっている(表1「入館者数の推移」参照)。特に2012(平成24)年度からは展覧会の内容を強化し、後述するミュージアム・ツアーも実施、プレスリリースを行うなどして広く資料館の存在をアピールしている。2012(平成24)年度は金沢大学創基150年の重要なイベントとして、大学史に関する特別展「人物で見る金沢大学の150年」を行ったことも入館者数の増加の大きな要因であった。とはいえ、常勤の教職員は開館当初から今に至るまで配置されておらず、館長、副館長も兼任であるため、館のパフォーマンスは一般の博物館と同様にはいかない面も大きい。展示だけでなく寄贈・移管資料の調査・整理、保存環境の整備、レファレンスや取材対応など増え続ける業務に対応しきれないのも事実である。資料館の人員としては、設立当初の1989(平成元)年から2008(平成20)年までは館長と非常勤職員2名の3名、平成21年度から25年度までは館長、非常勤職員3名の4名、平成26年から現在まではこれに副館長1名を加えて5名で運営している。職員は情報部情報企画課総務係の所属で資料館担当とされており、事務担当1名、学芸担当(筆者)1名、文書担当1名という構成である。

表1

## 入館者数の推移



次に、資料館と博物館学の授業との関係をみていく。ここでいう授業は「博物館実習」とそれ以外の「博物館学に関する科目」<sup>iii</sup>の二つに分けられる。どちらも学芸員取得に必要な科目である。記録によると資料館が「博物館実習」あるいは「博物館学に関する科目」に協力・連携し始めたのは1990(平成2)年からとなっている。この年の9月に6日間、文学部考古学研究室の学生4名を博物館学実習で受け入れている。残念ながら実習内容自体は不明だが、第四高等学校(以下、四高)の考古資料をはじめ城内キャンパス時代からの遺物を受け継いでいるのでこれらを使って進められたものと思われる。次に記録があるのは1996(平成8)年で、同じく文学部の博物館実習だが、この年の活動の内容も不明である。ただし、この年の資料館だより7号では「ユニバーシティミュージアム」の構想が述べられており、10月に「ユニバーシティミュージアム設置に関する構想委員会」が発足している<sup>iv</sup>。その後2000(平成12)年にも文学部の博物館実習を受け入れているが、資料館だより16号には「4月：平成12年度文学部博物館実習開始、実習生は常設展の監視、企画、展示換え等

参加」とある<sup>v</sup>。2005（平成17）年度から2007（平成19）年度にかけても実習の受け入れがあったが、2008（平成20）年になると資料館収蔵庫の積層化のため大規模な工事が行われたため実習の受け入れは中止になる。ここから2013（平成25）年度までは博物館学との連携は行われなかった。金沢大学では2008（平成20）年に学部制から学域学類制に切り替わったため、文学部としての実習の受け入れはここまでということになる。その後、2013（平成25）年度の後期から実習の受け入れではなく、博物館学の授業への協力・連携を開始し、現在に至る。館長や職員が数年単位で入れ替わる中でも、断続的にはあるが博物館学を担当する教員からは資料館を活用しようとする動きがあったことがわかる。

学芸員資格については博物館法施行規則で資格取得のために科目が決められている。同規則は2009（平成21）年4月に規則が一部改正、2012年（平成24）年から科目はそれまでの8科目から9科目に、単位数は12単位から19単位に変更となった<sup>vi</sup>。この規則改正は、学芸員資格を取得する者の数に対して学芸員として就職できる可能性が極めて低いという現実を端を発しており、資格取得のハードルを上げることで専門職としての質の向上をはかるとというのが目的になっている。当館の場合、2013（平成25）年度に博物館学の授業と連携を再開しているので、金沢大学での授業は改正後の博物館法施行規則にのっとって実施されるようになったことになる。単位数が増えたことで教員と学生の双方で負担が増える中、大学の中にある資料館が資するところが大きくなったのは当然のなりゆきであるといえる。

2008（平成20）年までの博物館実習の受け入れが館園実習であったのに対して、本報告で述べる2014（平成26）年度からの学生企画展は館園実習ではない。すでに述べたとおり博物館実習の科目は事前指導を含めた学内実習と館園実習で構成されているが、学内実習は担当教員等が行い、館園実習は学生が任意で選んだ他館で行う。あるいは総合博物館等を有する大学の場合は自校で館園実習を行う場合もある。現在の金沢大学においては、館園実習は学外の博物館・美術館等で行い、資料館における学生企画展の開催は学内実習の課題の一つとして実施されている点が、以前と異なる。

なお、2008（平成20）年までの実習をふりかえったが、2013（平成25）年からの博物館学への資料館の協力と連携は博物館法施行規則改正後の資格取得基準に対応したものであることを付け加えておきたい。

## 2. 2014（平成26）年度の学生企画展

博物館実習において課題として企画展示をテーマ設定から実際の展示、広報活動に至るまで一貫して行うのは、資料館の記録上この年が初めてである。担当教員とは事前に打ち合わせを行い、10月から展示の準備を行うことになった。この際に資料館の年間展示スケジュールの都合で12月から開催となったため、結果として多くの学生が館園実習を終えた状態でこの企画展に取り組んだ。学生が中心となり、テーマ設定から展覧会の実施に至るまで主体的に活動することがこの課題の大きな特徴であり、資料館としては施設や什器、プリンター等のハードの提供、パネル制作や広報活動などのサポートを行った。また、展示の企画段階では、資料館から学芸担当として筆者が博物館学の授業で展示企画の説明を行ったり、展示室



図1 学生が制作したポスター

で予想される具体的な作業の説明を行ったりした。

担当教員と資料館から出した制限は資料館および学内で所蔵する資料を使用して展示を行うこと、展示資料は金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアム<sup>13)</sup>などを参考にしながら選定することといったものであった。

展示テーマは自然が豊かな角間キャンパスにちなんで「植物」で、展覧会名は「学生が贈る、企画展示。植物図鑑」（「図鑑」ではなく「図館」）となった。企画展の学生による挨拶文には次の一文がある。

「金沢大学角間キャンパスはご存じの通り自然に恵まれた環境です。皆さんは最近いつ身の回りの自然に目を向けましたか。風景の一部となっていませんか。小学生のときは植物の観察日記をつけたり写生をしたりと、自然に触れる機会が多くありました。しかし成長するにつれその機会は減ってしまったように感じます。そこで私たちは様々な視点から捉えた植物に関する展示を行い、皆さんが改めて植物の魅力を発見できる機会をつくりたいと考えるに至りました。」（一部を抜粋）

ここでは「様々な視点」とあるが、実習生は文系の学生であったため、自然科学的な視点ではなく、資料館および附属図書館が所蔵する植物（一部菌類を含む）に関する学術資料に対する博物学的、あるいは造形芸術学的な視点という意味である。文系資料によらず、美術作品においても時系列に資料を展示し、コンテキストの中で全体を見渡すといった手法がオーソドックスな展示構成であるが、昨今トレンドになっている主題やテーマに分けて異なる時代、形態の資料を展示する手法<sup>14)</sup>を用いており、「植物」というテーマのもと、前身校である四高から金沢大学までの資料を、形態、内容ごとに展示することになった。展覧会テーマが資料や先行研究に依存するのではなく、企画者のアイデアをもとに計画されることになった経緯は、学生が自分たちで再発見した資料を同世代の学生をはじめ一般の利用者にも広く知ってもらいたいという思いからである。とはいえ、実際には数か月という短い期間で企画された展示であるため、展示コンセプトによって来館者に新たな発見を与えるというところには至っておらず、コレクション紹介にとどまっている感は否めなかった。

学生は2名が資料館との連絡係となり、準備を進めた。デザインを行う班、展示を行う班、解説パネルやキャプションの原稿を作成する班などとして作業を分担した。それぞれの学生が特性を活かすことができ、展示準備を進めた。特にポスターはAdobe社のアプリケーションソフトillustratorおよびPhotoshopが使える学生が制作したため、非常に完成度の高いものとなった（図1）。また、資料館



図2 展示作業



図3 学生によるミュージアム・ツアーのようす

と図書館の所蔵資料に加えて本学の梅林正芳教員（金沢大学理工学域自然システム系）による植物図も展示した。日本では数少ない植物図を制作する研究者によるものであり、非常に貴重な展示物となった。植物図の展示については資料館側から学生に提案したもので、附属図書館所蔵の第四高等学校教育掛図の植物図と対比する形で現代の植物図を展示する意図があった。この教員からの借用・運搬も学生が行った。

最終的に出展されたものは、資料館所蔵の14点（キノコムラージュ標本11点、暁烏陶磁器コレクション3点）、附属図書館中央図書館資料14点（文献4点、教育掛図10点）、学内の教員の植物図16点の計44点となった。パネルは解説パネルが16点（展覧会謝辞1点含む）、資料キャプション44点、キノコ総選挙パネル<sup>3</sup>1点、来館記念の顔出しパネル1点の計62点となった。パネルやキャプションの原稿はいずれも学生によるものだが、文章の校正と印刷、パネル制作の指導は担当教員と資料館職員が行った。また、キャプション制作においては資料情報の項目について既存のキャプションをもとに指導した。

また、企画展開催後にミュージアム・ツアーと題して学生が解説をしながら来館者と展示室をめぐるといったイベントも実施した（図3）。このイベントは、通常は資料館職員が展示毎にお昼の時間に行っているもので、資料館展示室は附属図書館に付設されていることもあって学生だけでなく一般の利用者の参加もある。学生によるミュージアム・ツアーでは5日間で54名の参加者があり、学生だけでなく教職員、学外者もあった。会期中の入館者数は開館していた34日中930名であった。前年は学生による企画展ではなく資料館によるもので、66日中1,089名だったので、前者の一日平均の入館者は27.4名、後者は16.5名と学生による企画展は盛況であったといえる<sup>4</sup>。

付け加えておくと、この年の学生による企画展の一部は、翌年の2015（平成27）年の前期に附属図書館自然科学系図書館において規模を縮小しアウトリーチ展示として再度活用した。このアウトリーチ展示は、元の展覧会を企画したほとんどの学生はすでに卒業しているので、残された資料と解説パネル、一部修正したポスター等で自然科学本館に通う学生や一般の利用者に実習生および資料館の活動を紹介する形となった。金沢大学資料館が位置している角間キャンパスの北地区は教養科目を受講する主に1、2年生か文系の学生が学ぶ場所であり、理工系と医学系の3年以上の学生が資料館での展示に足を運ぶことはまれであるため、アウトリーチ展示を年に一度実施している。企画展の材料を二次利用することは、少ないソフトでも多くの学生、市民に展示活動を周知できる有効な手段と考える。

### 3. 2015（平成27）年度の学生企画展

2015（平成27）年の博物館学受講者は20名でほとんどが文系の4年生であった。前回と同様に10月から展覧会の具体的な準備は始まったが、展示構想の打ち合わせは夏期休暇前から始まっていた。夏休み中も他館での実習や教育実習などを行う者も多かった中、テーマ選びのために打ち合わせを行い、後期が始まるとすぐに博物館実習の授業内でディスカッションが行われた。学内のコレクションから発想したアイデアを複数出した後、最終的には四高時代の校風改革運動の中で起こった「寒潮事件」をテーマにすることになった。2014（平成26）年度の特別展は、四高の校風をテーマにした「超



図4 学生が制作したポスター

然一第四高等学校の校風と学生たち」(会期:2014(平成26)年10月15日~11月28日)であった。ここでは四高の校風「超然」が形成される中で起こった重要な要因として「寒潮事件」が説明されていたので、資料館の展示歴の中では学生の企画展は意図せずにスピノフ展示という様相を呈した。展覧会名は「破かれた恋愛小説 ~『寒潮』に翻弄された四高生~ 学生が贈る、企画展示。」となった。学生たちは企画当初から「資料館の学芸員では思いつかない、学生ならではの企画」を構想していた。以下は学生が作成した展覧会チラシにある展覧会概要である。

「当企画展では、小説『寒潮』の世界を学生の目線でわかりやすく解説するとともに、「寒潮事件」の経過を追うことで、なぜ『寒潮』が社会問題となったのか、また事件化の過程から見てくる、当時の四高生の気風を紹介したいと思います。」(一部を抜粋)

「寒潮事件」自体は明治40年代の出来事なので、現代の学生にとっては恋愛に対する考え方に大きなギャップを感じる事が多々あったが、学生時代の恋愛という、コミットメントを示しやすいテーマを選んだことで、展示にさまざまな仕掛けを用意することができた。

企画展の準備では、学生自身が開館までに必要な作業項目をもとに4つのグループをつくった。資料の管理・展示を行う展示班、展示資料に付けるキャプションおよび解説パネルを作成するキャプション班、ポスターやワークシート、パネルのデザイン等を行うデザイン班、ワークショップ等企画展に付随するイベントの計画・広報を行う企画班、そしてそれぞれのグループには班長がおかれた。さらに、全体の取りまとめを行い、資料館との連絡係にもなる2人の学生が選出された。それぞれの作業に資料館職員がかかわって少しずつ準備を進めた。とりわけ学生との間で学芸員の実務を経験する上で有意義な意味をもったのが、企画書などの決裁、他館からの資料の借用、企画展チラシの印刷業者とのやりとり、テレビ・ラジオ局での広報活動であったと思われる。展示の企画案は資料館が通常使っている様式を学生に示してこれに書き込む方法をとった。前述したとおり、資料館職員は情報部に所属しているため、筆者などが起案者となり、係長から部長、資料館長までの決裁をとっている。学生の企画案も同様の流れをとったが、学生にとっては授業において担当教員と資料館のチェックを受ければそのまま進められると考えていたようなので、文書の決裁という過程自体が未知のものであり、他館での実習では学べない要素だったといえる。また、他館からの借用についても資料館職員が展示班の学生三人を伴い行った(図5)。ここでは金沢くらしの博物館から明治時代の髪型である「束髪」の頭部モデルを借用するために、借用書、調書、梱包材などを持参した。所蔵資料の照会や書類の取り交わし等の手続きについては資料館で行ったが、調書の作成や搬出は学生の手で行った。この点につ



図5 金沢くらしの博物館の学芸員から説明をうける学生



図6 展示パネルの制作

いても他館での実習では体験することが少ないため、得難い体験となったはずである。次に、デザイン班が作成したA4両面印刷のチラシ（表面とポスターは同じデザイン）については、実際に印刷業者との打ち合わせを学生が行った。伝票の入力や仕様書の作成などを資料館が済ませたあと、学生がillustratorで作成したデータをもとに学生と印刷業者が最終調整を行って入稿した。印刷物については外部委託する館も非常に多いので、実地で学べる貴重な機会となったに違いない。最後に地元テレビ局での広報活動をあげておこう。資料館では展示毎に各報道機関に対してプレスリリースを行っており、主に新聞各社から取材を受けるが、担当教員の提案でテレビ金沢の夕方の情報番組に出演することになった。企画班の学生三人が四高生と北陸女塾の学生の仮装をして、寸劇の形式で告知を行った。撮影までのテレビ局との交渉は情報部職員の尽力によるものである。学生の企画展は担当教員と資料館だけでなく、部局をあげての協力があつた。また、金沢大学が運営し、FM石川で放送しているラジオ番組「金沢大学Radio Campus」にも学生が出演し、本企画展のPRを行った。ラジオ出演は2014（平成26）年度も行つたが、テレビでの告知は筆者が着任した4年弱の期間でも初めてであり、学生だけでなく本企画展関係者にとっても貴重な経験となった。前後するが、プレスリリースの原稿も学生が作成し、資料館がチェックした。総じて、前年度の企画展時よりも作業量は格段に増えたが、得るものも多かったと思われる。資料館で通常業務として行っていることが学生には新鮮だったし、学生のアイデアが構想だけで終わらないために、手続きや書類の作成等どういったサポートが有効なのかを教員や職員が考える契機ともなった。

出展された資料は、資料館所蔵の24点（四高同窓会資料、卒業写真など）、附属図書館中央図書館所蔵5点（刊行物）、学外からの借用資料2点、学生が持ち込んだ私物のハンズオン展示物4点（小説の中に登場する、恋文、香水、日本人形）の計35点となった。パネルは解説パネルが65点（展覧会謝辞1点含む）、資料キャプション32点、来館記念の顔出しパネル3点の計62点となった。これに加え、前年と異なる展示物としてi-pad2台を用意し、一方には現物を展示できない代わりに小説『寒潮』のpdfファイルによる全文、もう一方には学生が募集した恋愛エピソードをpdfファイルにして見られる仕組みを用意した。また、現代の学生の恋愛エピソードを収集するために展示室と図書館ブックラウンジ「ほんとかふえ。」にポストを設置、図書館カウンター前には図書館職員の協力を得て恋愛に関する書籍を40冊展示した（図7）。書籍は展示と同時に借りられるようになっており、利用者も多かった。また、数人の学生がオープニングアニメーションを制作し、展示室入り口のモニターに映し出した。資料館は中央図書館の奥まった場所にあるため、資料館の企画でも同様に展覧会のコマーシャルを流したことが何度かある。ただし、学芸担当一人では展示が限界で毎回というわけにはいかなかったので、マンパワーの重要性を認識した。ミュージアム・ツアーについては本稿執筆の時点では行われていないが、2016（平成28）年1月中ごろから一週間に渡って学生たちにより開催される予定である。

『寒潮』は新聞小説であり、所蔵する図書館から借用ができなかったため、一次資料が展示できないというデメリットがあつた。また複製を展示しても資料自体が文字情報であるため、視覚的にうったえるためには多分にアイデアが必要で、学生たちは展示室に足を運んでもらうように様々な工夫を行った。恋愛エピソードについては、計画当初あまり集



図7 中央図書館カウンター前の本の展示

まらない可能性もあると予想していたが、意外にも多くの投稿があった。現時点では学生たちがかけた「学生ならではの企画」は我々の既成概念を超えて、成功したといえる。

#### 4. 今後の課題

2年に渡って学生による企画展を開催したことで、資料館は学内共同利用施設の役割を存分に発揮できた。学術資料という文化財を有効に利用する手段となったし、展示室を学習の場として活用する機会を得た。企画展に参加した学生だけでなく、展示室に足を運んだ博物館学に関する科目を受講する3年生以下の学生にも刺激になったはずである。また、展示に参加した多くの学生が館園実習を終えており、学芸員の実務を経験した上で課題が進められたことも、学生による企画展が実現した大きな要因である。個々の学生が異なる博物館・美術館で得た知識や技術は、展示準備の協議において活発に交換され、アイデアの源泉となった。資料館職員が学生を通して他館の実務を知ることができたことも貴重な機会であったといえる。資料館、学生の双方にとって今後の学びとなったことは、この企画展の大きな成果である。資料館は貴重な学術資料を所蔵しているが、未だに学内での認知度は高いとはいえない。これを資料館職員だけでなく、学生の手で周知することができるのは大学博物館独自の取り組みといえる。こうした授業形態をモデル化することで今後の発展が予想される。

とはいえ、様々な課題も見つかった。まずは展示の企画、テーマの設定についてである。実質3ヶ月程度の構想期間で長い会期の展覧会テーマを設定するのは非常に困難であった。1年目の「植物図館」は学生の嗜好によって企画が進んだが、内容的には資料紹介となり、ストーリー性が乏しかった。一方、2年目の「破かれた恋愛小説」では1年目より展示のテーマはブラッシュアップされたが、小説『寒潮』とその事件についての先行研究の精査がやや弱かったように思える。事実関係は明治から昭和初期にかけての文献によって追うことができたが、現代の研究者が一連の事件をどのように分析しているかなどの考察が展示の中で明らかにされるとより学術的な価値が出たと思われる。また、実務的な面では解説パネルやキャプションの原稿を精査する期間が極めて短かったことも課題となった。学生は授業と卒業論文の短い合間を利用して原稿を作成したわけだが、開館の1週間前に出来上がる原稿もあり、校正には労力を要した。こうしたことは短い準備期間に対して広い展示スペースを提供したことに原因があると思われる。2年とも展示室の半分を常設展、もう半分を企画展スペースにしたが、それぞれ150m<sup>2</sup>ほどの面積があったため、多くの展示資料とパネルが必要になり、その分準備も膨大になったものと考えられる。

#### おわりに

博物館・美術館では、一方的に展示やサービスを提供する方法から、来館者と館の双方型のコミュニケーションが可能な展示方法を目指す傾向にある。事実、博物館を訪れた我々は提供される情報に感心する一方で、その感動をなんらかの方法で誰かに話したくなる。アンケートに記入したくなる衝動はこれに近い。2015（平成27）年度に学生が行った恋愛エピソードの収集は、明治の恋愛の展示一事件に発展する社会気風も含めて一を見た来館者が自らの恋愛体験を自然に吐露してしまうという作用をもっていた。もちろん無記名なので参加しやすいという面もあったが、個人が識別されてしまうSMSやweb上でのサービス等では収集できない、アナログな手法による収集方法



自体がこの企画に合致していたのである。何より、大学史に関する企画展で来館者の恋愛話を展示物の一部にしてしまうという発想には到底かなわないと感嘆してしまった。当学でもアクティブ・ラーニングのプログラムが実践されているが、本企画展の実践はまさにこれにあたるといえる。プログラムのようにお膳立てすることもなく、学生が自主性を発揮して実習を行い、明確な形で結果を示すことが可能となった。これはひとえに資料を借用した金沢くらしの博物館、資料館長および副館長はじめ資料館職員、情報部が全面的に学生をバックアップすることができたためである。学生のもつ力を存分に発揮させることで、大学でしかできない実験的な展示が可能となったことは大きな成果であったと考える。

## 注

- i 「博物館実習ガイドライン 文部科学省」2009（平成21）年4月
- ii 学術資料については現在も資料整理が行われているため、今後も資料点数は増えることが予想される。
- iii 博物館学に関する科目は、生涯学習概論、博物館概論、博物館経営論、博物館資料論、博物館資料保存論、博物館展示論、博物館教育論、博物館情報・メディア論、以上2単位、博物館実習3単位（博物館法施行規則、第一章 博物館に関する科目の単位（昭和三十年十月四日 文部省令第二十四号））
- iv 「資料館だより No.7」1996年3月28日、田中昭文堂印刷、p. 12
- v 「資料館だより No.16」2000年11月20日、田中昭文堂印刷、p. 10
- vi 博物館法施行規則（昭和三十年十月四日 文部省令第二十四号）第一章 博物館に関する科目の単位
- vii ただし、平成12年と平成18年にも博物館実習を受講する学生が常設展などの展示作業や会期中の監視を行った記録はある。
- viii 金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアム：<http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/>
- ix 2015年の例では兵庫県立美術館で開催された「パウル・クレー ～だれにもないしょ。～」(会期：平成27年9月19日～11月23日) など。
- x 展示資料であるキノコムラージュ標本の中から来館者が気に入ったものの資料写真にシールを貼るというイベント。
- xi 平成25年と26年で会期が異なるのは、後者の後半で別の展覧会を行ったためである。ちなみに前者の企画展は「19世紀の3D 一ステレオ写真の世界一」(会期：平成25年12月11日～平成26年3月20日) であった。